

# 奈良 いのちの電話

2017  
夏  
第369号

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp

## 特集 続・DVについて考える

参画ネットなら



うちわ絵・小山いつ子

わーい  
晴れたよ  
おひさまだ！

## 風鐸



先日、インドの仏跡を巡る旅に行って来ました。ラジギールの霊鷲山やブッダガヤの大菩提寺での法要、日本寺への訪問、バラナシのガンジス河の沐浴風景など心に残る旅でした。

インドの人口は世界第2位、英語も公用語の一つで、数字に対する資質や欧米との時差などを強みに、ITを中心として急激に発展しつつある国というイメージで訪れたのですが、デリーでの滞在も

短く、ムンバイ等の大都市にも行かずに、北の内陸部が主な訪問地でありましたので、インフラの状況、生活の様子、衛生状態など驚くことばかりでした。

道を走る車の多くは相当の年代物。それらがクラクションを鳴らして走り回る。道路は未舗装部分も多く、乾季とも重なり土埃で両側の木立は真っ白。沿道の工事現場や田畑には働く人はいるが機械類はあまり見当たらない。町に近づくと急に人が増えだし、バスを降りると今度は遅い物売り達。街なかを牛がウロウロしているのは、奈良の鹿を見慣れているというもののやはりびっくりです。

しかしながら、人々の表情に暗さやギ

スグスした様子は無く、車窓から見える田園風景は緑濃く、豊かささえも感じられました。何十年か前の日本のよう。様々な社会的問題をはらみながらも、また都市と地方の時間差はあるものの国全体が、今日よりは明日と少なくとも物質的には確実に進展している時期なのでしょう。その先に更なる幸福感があるかどうかは我々日本人もしっかりと検証してみなければならぬところです。

インドを訪れた人はその後「どっぷりハマる人」と「二度と行きたくない人」に分かれるそうですが、私の場合は、数年後さらに発展した地方部を再度訪れたと思った次第です。(宗)



# 続・DV について考える

～ DV のない社会をめざして～

## <デート DV 防止教育と加害者更生プログラム>



前号では、DV の現状や被害者支援について取り上げた。今回は DV をなくすためのいろいろな取り組みについて考えてみたい。DV は配偶者間だけでなく、結婚をしていない若年層にも広がっている。交際相手との間で起こる暴力や暴言、束縛などを「デート DV」と言う。また、携帯電話のアプリ（Twitter、LINE、Facebook、ゲームサイトの掲示板等）を使った出会いにより、さまざまな暴力に巻き込まれる事例も後を絶たない。

そこで、奈良県において、DV をなくす活動を行っている『参画ネットなら』のメンバーに、デート DV 防止教育、DV 加害者更生の必要性についてお話を伺った。『参画ネットなら』は、2010年度から子どもたちが DV の被害者にも加害者にもならないために、また将来にわたって暴力の無い、対等で互いを尊重し合える関係を築くために年間7,000人を超える小中高生や教育職員、保護者等を対象にデート DV 防止教育の出前講座を行っている団体である。



### デート DV

DV（ドメスティック・バイオレンス）とは夫婦や恋人などの間で起こる暴力のことであるが、そのうちで交際中の間柄におこる暴力のことをデート DV という。デート DV には、身体的暴力（たたく、蹴る、物を投げつける等）、精神的暴力（大声でどなる、大切にしている物を壊す等）、性的暴力（断っても無理やり性的な行為を強要する等）、経済的暴力（デート代をいつも出させる等）などがあるが、若者に特徴的なものとして、常にケータイをチェックして誰からの LINE かしつこく聞くことや、交友関係を制限することなどがある。これらは精神的暴力である。

デート DV が起こる背景としては、男性は少しぐらい強引な方がいい、女性はおとなしい方がいい、などの「男らしさ」「女らしさ」の意識が考えられる。またテレビやマンガ、ゲームなどでは、一般的に「暴力＝強い男」が描かれることが多く、男性の暴力を大目に見る傾向がある。若者の中には、好きだから相手を独り占めにするために束縛したり（されたり）、支配したり（されたり）するのはあたりまえという考えもあって、デート DV につながっている。

### デート DV の現状と防止教育

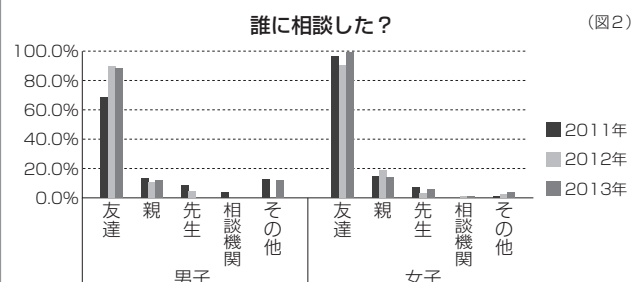
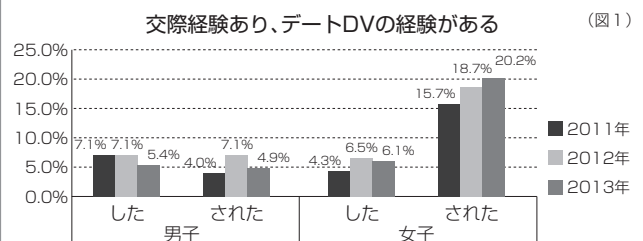
奈良県内の高校生（10,118名）に対して、2011年～2013年に行った調査では、デート DV を「した」との回答は、女子では4.3%～6.5%、男子は5.4%～7.1%と男女で顕著な差はない。しかしデート DV を「された」との回答は、女子は15.7%～20.2%で、男子の4.0%～7.1%の3～4倍となっている。（図1）大人の DV 同様、本人が DV と気づいていないことも多く、気づいたとしても親や先生などの大人には相談することは少ないので表面化しにくい側面がある。高校生ではデート DV の経験ありと答えた女

子の約40%、男子の約20%が人に相談しているが、相談相手はほとんどが友人に対してである。（図2）大人に相談するとすぐ「別れなさい」と言われるので親や先生には相談しないと言う。『参画ネットなら』の出前講座では、デート DV の正しい知識を持ち、誰もがいい相談相手になれるよう、学年や全校一斉に受講してもらう。話をきいて、自分のしていたこと、されていたことは DV だったんだと気づく子もいる。

そのように意識啓発を行うことで、将来的に DV をなくすことにつながるのがデート DV 防止教育である。

参画ネットなら 2015年発行

「ストーカー防止・デート DV 防止教育推進事業報告書」より



## 加害者更生プログラム

DVをなくすためには、被害者支援の一環として、加害者の意識を変えていかなければならない。『参画ネットなら』ではメンバーのうち2人が日本で最初にDV加害者更生プログラムを始めた東京の民間団体「aware（アウェア）」で研修を積み、現在大阪の「NOVO（ノボ）」（NO VIOLENCE ROOM OSAKAの略）でファシリテーターとして活動している。NOVOではDV加害行為を真摯に反省し、変わりたい、パートナーと対等な関係を築きたいという人に教育プログラムを提供し、対等な関係を営める「非DVのカップル」を増やすこと、暴力を容認しない社会を目指している。

プログラム参加の、前段階として面談を行う。

- ①面談3回（これまでの暴力の内容、DVにつながる価値観などを詳しく聞く、怒りが湧いた時の対処法を伝えるなど）
- ②パートナー面談1回（暴力の内容や、どうしたいのかなどの思いを聞く）

面談の時点では、ほとんどの加害者が暴力を「これくらい大したことではない」と過小評価している。面談後、本格的にプログラムへの参加となる。

プログラムは週1回、男女のファシリテーターが入り行われる。52回以上（1年以上）の参加でパートナー（被害者）が「もう行かなくていい」と言った時だけが卒業となる。

グループワークは、

- ・DVについて学ぶ ・身の回りの出来事を振り返る
- ・参加者が気づき合う ・パートナーの気持ちや子どもへの影響を知る ・怒りが湧いた時のおさめ方などを具体的に考える。

これまで3年間実施してきて、問い合わせ、相談が110～120人、そのうち約7割が面談実施、約4割がプログラム参加、52回以上参加したのは11人だった。パートナーとやり直したいと思っている人は継続してプログラムに参加する人が多いが、パートナーが別居や離婚を決めた時点でやめる人もいる。また、月に1回女性の会も実施している。被害者もDVの正しい知識を持ち、自分の人生を自分で選んでいく力を回復してもらうことを目指している。

加害者更生プログラムの役割は、被害者がどんな思いをしてきたかに共感し、謝罪してDVをやめること、また被害者がどうしたいかという希望に沿えるよう加害者に働きかけることなどがある。

(M)

参画ネットなら「デートDV電話・メール相談」

TEL 090-8140-8061

相談日時 土曜日11:00～16:00

Eメール datedvnara@yahoo.co.jp

## 情報化社会のなかで考える

# 出会い ⑨

## —— 情報化時代におもう ——

天理大学准教授

八木 三郎

情報通信機器の発達により携帯電話やパソコンが普及し、私たちの日常生活は激変している。買い物などの日々の経済活動をはじめ、様々な情報を瞬時に発信、収集ができる至便な時代となった。とりわけ、携帯電話の普及は急速に進み、目をみはるものがある。総務省の『情報通信白書』によれば、平成26年度末のわが国の携帯電話の普及率は94.6パーセントと報告している。データ上では今や10人中9人が携帯電話を所持していることになる。そのほか、パソコンの普及も顕著であり、インターネットの利用は日常欠かすことのできない重要なツールとなっている。

他者との意思疎通を手紙や家の固定電話、公衆電話を通して行っていた「昭和のアナログ時代」に生きる人たちからすれば、情報化時代の「黒船」ともいべき時代を迎えている。

そもそも情報化時代について論じられるようになったのは1960年代の頃からであるが、その研究者の一人に情報化社会を予言した人がいる。アメリカの評論家、未来学者といわれたアルビン・トフラーである。彼が1980年に出版した著書、『第三の波』で情報化社会に言及している。それは人類が過去に経験してきた第一の波である「農業革命」、第二の波の「産業革命」に加え、第三の波として「脱産業革命」が近未来において到来することを著に記している。その脱産業革命とは、情報革命のことであり、いわゆる情報化社会、情報化時代を意味している。

いつでも、どこでも、誰でも情報にアクセスができ、必要に応じて取得できる便利な環境に身を置く私たちにとって“一期一会”と称する人の出会いも大きく変容している。その一つが、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の登場である。SNSは、それぞれが求める多種多様な用途に応じて“出会い”の場を作り出し、他者とのやりとりをつなぐコミュニケーションの場を提供している。ツイッター、フェイスブック、ラインなどがそれぞれ、簡単に出会いの場を創出し、多くの人たちが利用している。

しかしいっぽうでは、時折テレビで報じられるSNSに絡む悲しい事件も少なくない。また、生活が便利になることによって個人がアトム化（孤立）し、他者との関係性が希薄化している。情報化社会は“無縁化”を加速させ、様々な負の課題を生み出している。